

古典A 竹取物語(冒頭) なよたけのかぐや姫① 唱和用

みんなで声を合わせて、本文を読めるようにしてあげよう。

本文	現代語訳
今は昔、	今ではもう昔のことだが、
竹取の翁といふ者ありけり。	竹取の翁という者がいた。
名をば、わかきの造となむいひける。	名を、わかきの造といった。
野山にまじりて竹を取りつゝ、	野山に分け入って竹を取っては
みづひのいとに使ひけり。	いろいろなことに使っていた。
その竹の中じ、	その竹の中じ、
もと光る竹なむ一筋ありける。	根元が光る竹が一本あった。
あやしがりて寄りて見るに、	不審に思って寄ってみると
筒の中光りたり。	筒の中が光っていた。
それを見れば、三寸ばかりなる人、	それを見ると、三寸ほどの人が
いとつひしくしてゐたり。	とてもかわいらしく座っていた。
翁言ふやう、	翁が言うには、
「わが朝ごと夕ごとに見る竹の中に	「私が毎朝毎夕見る竹の中に
おはするにて、知りぬ。	いらっしゃったので、わかった。
子になりたまふべき人なめり。」	わが子におなりになるべき人に違いな い。」
とて、手にうち入れて、家へ持ちて来ぬ。	と言って、手に入れて、家へ持ってきた。
妻の嫗に預けて養はす。	妻である嫗(おうな)に預けて育てさせた。

古典A 竹取物語(冒頭) なよたけのかぐや姫② 唱和用

みんなで声を合わせて、本文を読めるようにしよう。

本文	現代語訳
うしろきいと限りなし。	かわいらしいこの上ない。
いとをさなければ、籠に入れて養ふ。	とても幼いので、かごに入れて育てる。
竹取の翁、竹を取るに、	竹取の翁が竹を取ると
この子を見つけてのちに竹取るに、	この子をみつけてのちに竹を取ると、
節を隔ててよむに	節と節の間にと
黄金ある竹を見しへるに重なりぬ。	黄金の入った竹を見つけたことがたび重なった。
かくて、翁やちやう豊かになりぬへ。	こうして翁はだんだん豊かになっていく。
この児、養ふほどに、	この子は育てるうちに
すくすくと大きくなりまゐる。	すくすくと大きくなっていく。
三月ばかりになるほどに、	三か月くらいになる間に、
よきほどなる人になりぬれば、	ちょうどよい大人になったので
髪上げなどまつして、	髪上げの儀式を準備して、
髪上げさせ、裳着す。	髪上げをさせ、裳を着せる。
帳の内よりも出ださず、いつき養ふ。	とばりの中から出さず、大切に育てる。
この児のかたち、	この子の顔かたちは、
けうらなること世になへ、	清らかで美しいことこの世にまたとなへ、
屋の内は暗き所なく光満ちたり。	屋敷の中は暗いところがなく光が満ちていた。

古典A 竹取物語(冒頭) なよたけのかぐや姫③ 唱和用

みんなで声を合わせて、本文を読めるようにしてあげよう。

本文	現代語訳
翁心地あしく、苦しきときも、	翁は気分が悪く、苦しいときも、
この子を見れば、苦しきこともやみぬ。	この子を見ると、苦しいこともなくなった。
腹立たしきことも慰みけり。	腹立たしいことがあっても、心が慰められた。
翁、竹を取ることも久しくなりぬ。	翁は、竹を取ることが永く続いた。
勢ひ猛の者になりにけり。	勢力のある富豪になったのだった。
この子いと大きになりぬれば、	この子がたいそう大きくなったので、
名を、三室戸齋部の秋田を呼びつけさせず。	名前を、三室戸齋部の秋田を呼んで、つけさせた。
秋田、なよ竹のかぐや姫とつけし。	秋田は、「なよ竹のかぐや姫」とつけた。
このほど三日うちあげ遊ぶ。	この名づけの儀式の間、三日間、宴会を催し、音楽、歌・踊りを楽しんだ。
よるづの遊びをぞしける。	さまざまな音楽、歌・踊りをしたそつだ。
男はつけきはす呼び集入て、	男は、えり好みせずだれでも呼び集めて、
いとかこしく遊ぶ。	たいそう盛大に、音楽、歌・踊りを楽しんだ。
世界のをのこ、貴なるもいやしきも、	世の中の男は、身分が高い者も低い者も
いかでこのかぐや姫を得てしかな、	何とかしてこのかぐや姫を妻にしたいなあ、
見てしかなど、音に聞き、めでて感ら。	結婚したいなあど、噂に聞き、恋焦がれて心が乱れる。